

〈原著論文〉

## 近代日本における「文化」概念の成立(2)-2 ——マシュー・アーノルド『*Culture and Anarchy*』における 「culture」と「civilisation」の問題性——

清 水 均

### 抄 録

---

前稿（清水，2016年10月）に引き続き、『*Culture and Anarchy*』が提示した「culture」概念の問題性について論じている。

今回の論考では、アーノルドの「culture」には「教養」と「文化」の二つの概念が含まれ、それらがどのような関係性を持っているのかということを検証するとともに、彼の「culture」概念が「civilisation」との対抗関係において成立していることを論じている。

---

キーワード：カルチャー、文化、教養、文明、マシュー・アーノルド

## Ⅱ. マシュー・アーノルド『*Culture and Anarchy*』の問題性

### (3) 「culture」概念における「教養」と「文化」の相互関係

前稿「近代日本における「文化」概念の成立(2)―1―大西祝の意義とマシュー・アーノルド『*Culture and Anarchy*』の問題性―」（聖学院大学論叢第29巻第1号 2016年10月25日発行）の末尾において、マシュー・アーノルド『*Culture and Anarchy*』における「culture」には「教養」と「文化」との相互関係性、言い換えれば「個人レベルにおける人間性の完全」と「社会レベルにおける完全」という階梯的な関係性が含意されていることを指摘した。そのことは、先に引用した以下の記述に端的に示されていた。

Culture, which is the study of perfection, leads us, as we in the following pages have shown, to conceive of true human perfection as a *harmonious* perfection, developing all sides of our humanity; and as a *general* perfection, developing all parts of our society.

完全への努力である教養は、これからさきの頁に示したように、真の人間の完全とは、人間性のあらゆる面を発達させる、円満な完全であり、社会のあらゆる部分を発展させる、一般

的完全であると考えさせる。(岩波文庫『教養と無秩序』多田英次訳 2003年6月15日発行による。p. 17。以下に引用する訳とページ数は全てこれによる。)

前述したように、「教養」の目指す「完全」というものには、「個人レベルにおける人間性の完全」＝「円満な完全」が「社会レベルにおける完全」＝「一般的完全」に波及することが期待されている。即ち、「円満な完全」から「一般的完全」への階梯というものが想定されているのであったが、そのことはまた以下のような記述にもあらわれている。

As, in the first view of it, we took for its worthy motto Montesquieu's word: 'To render an intelligent being yet more intelligent!' so, in the second view of it, there is no better motto which it can have than these words of Bishop Wilson: 'To make reason and the will of God prevail!'

教養の第一の見解において、われわれはそのふさわしい標語として、モンテスキューの「知性ある人間をもっと知的にする」という言葉をとったように、その第二の見解においては、ウィルソン監督の「道理と神の意志とを世に行なわしめる」という言葉こそその最もすぐれた標語である。(p. 58)

the moment, I say, culture is considered not merely as the endeavour to *see* and *learn* this, but as the endeavour, also, to make it *prevail*, the moral, social, and beneficent character of culture becomes manifest.

教養が単にこれを知り学ぼうとする努力としてだけでなく、これを広める努力でもあると考えられる瞬間、教養の道徳的な、社会的な、慈悲ぶかい性格が明らかになる。(p. 60)

ここでアーノルドが想定している「(「culture」の) 第二の見解」である「道理と神の意志とを世に行なわしめる」、あるいは「教養の道徳的な、社会的な、慈悲深い性格」を有する「一般的完全」というのは、他の箇所でも「a public and national culture (公衆的な国民的教養)」(p. 261)あるいは「mind of the nation (国民精神)」(p. 265)と端的に呼んでいるものに相当し、「culture」が「国民」レベルにおいて宗教的、道徳的、精神的な概念であることを示唆している。

しかし、その一方でアーノルドは、社会全体あるいは「国民」全体においてそのように「culture」が浸透した状態を「美」と「英知」の問題に結節させ、「文学」「美術」等の、言わば今の「文化」に相当する具体的な領域を並べ上げて説明している点に留意する必要がある。例えば、既に引用した次のような箇所にも再度注目しておきたい。

Again and again I have insisted how those are the happy moments of humanity, how those are the marking epochs of a people's life, how those are the flowering times for literature and art and all the creative power of genius, when there is a *national* glow of life and thought, when the whole of society is in the fullest measure permeated by thought, sensible to beauty, intelligent and alive.

生活と思想とが<sup>レ</sup>国民的に輝くとき、社会の全体が十二分に思想に滲透され、美に対して鋭敏であり、英知にみちいきいきしている時が、いかに人類の幸福な瞬間であり、いかに国民生活の注目すべき時代であり、いかに文学と美術と天才のすべての創造力とのための花さく春であるかを、わたくしはくりかえし主張した。(p. 87) (傍線論者。以下同様。)

この「国民的」「社会の全体」のレベルにおいて、即ち「一般的完全」において「literature and art and all the creative power of genius」が「開花 (the flowering times)」している状態については、ここでアーノルドが「Again and again I have insisted」と言っている通りこれ以前の箇所においても指摘されており、それは例えば次のように記述されている。

The great works by which, not only in literature, art, and science generally, but in religion itself, the human spirit has manifested its approaches to totality, and a full, harmonious perfection, and by which it stimulates and helps forward the world's general perfection, come, not from Nonconformists, but from men who either belong to Establishments or have been trained in them.

一般に、文学、美術、科学だけでなく、宗教そのものにおいてさえ、人間の精神が全体性と十全な円満な完全とへの接近を表わすよすがとしたし、また、それが世界の一般的完全を促進し助長するよすがとしている、偉業は、新教的非国教徒からは生まれずに、国教に属するかあるいはその中で訓練された人びとから生まれている。(p. 19)

ここでは宗教（この場合は直接的には国教を指す）の役割の重要性を説いているのだが、その宗教の重要性が「文学、美術、科学」と同様の機能を持つことにおいて捉えられていること、そしてそれらが「人間の精神が全体性と十全な円満な完全とへ接近」し「世界の一般的完全を促進し助長する」という、「culture」の役割と同様のものとして捉えられていることは重要である。更には、

And religion, the greatest and most important of the efforts by which the human race has manifested its impulse to perfect itself,—religion, that voice of the deepest human experience,—dose not only enjoin and sanction the aim which is the great aim of culture,

the aim of setting ourselves to ascertain what perfection is and to make it prevail; but also, in determining generally in what human perfection consists, religion comes to a conclusion identical with that which culture, —seeking the determination of this question through all the voices of human experience which have been heard upon it, art, science, poetry, philosophy, history, as well as religion, in order to give a greater fulness and certainty to its solution, —likewise reaches.

人間が自分を完成しようとする衝動をそとに現わすよすがとなった努力のうち最も大きな最も重要な努力である宗教、あの最も深刻な人間的経験の声である宗教は、教養の大目的である目的、われわれをして完全とは何であるかを確かめこれを普及せしめるという目的を命令し奨励するだけでなく、人間的完全が何に存するかという問題を決定するさい、教養が達するのと全く同一の結論に達する、—その問題の解決により大きな充実性と確実性とを与えるために今までにそれについて聞かれた人間的経験の声のすべて、宗教だけでなく藝術と科学と詩歌と哲学と歴史との声によってこの問題の決定を求める教養が達するのと同一の結論に。  
(p. 61)

と述べ、ここでも宗教の役割について触れることにおいて、宗教が、「人間的完全」をもたらす「culture」の働きを有するものとして「藝術と科学と詩歌と哲学と歴史」と同等、同質のものとして言及されている。即ち、「文学と美術と天才のすべての創造力」「文学、美術、科学」「藝術と科学と詩歌と哲学と歴史」、そして「宗教」が、「culture」と同等の価値を持つものとして捉えられていることになるのである。繰り返して言えば、これらの領域は現在では「文化」の名をあてることが出来るものである。とすれば、アーノルドの中では「culture」は「人間性のあらゆる面を発達させる、円満な完全」、ひいてはそれが「社会のあらゆる部分を発展させる、一般的完全」をもたらし得るものとして規定され、「個人」と「社会(国家)」の二つのレベルにおける「完全」を「culture」の語に担わせているのであるが、現在の語彙からすればそのような「個人の教養」が「社会(国家)」のレベルに浸透した状態というのは、とりもなおさず「文化」が形成されている状態というふうに言うことができるであろう。あるいは逆に「文化」を受容することによって「個人の教養」が高められるということなのであり、要するに、ここには「教養」と「文化」との機能(作用)における相互関係というものが内包されているのである。

重要なのは、これをアーノルドが「culture」の一語をもって説明していることであり、その「文化」の内実として「文学、美術、科学、藝術、哲学、歴史、宗教」等を想定していることである。繰り返し指摘しておきたいのは、アーノルドの「culture」概念が現在の「教養」と「文化」との階梯的な関係性を提示していることである。

## (4) 「culture」と「civilisation」

このように「culture」が社会、国家において（特に産業革命直後の当時のイギリスにおいて）求められるものであるとされる時、一方でアーノルドには「culture」の対抗概念として「civilisation（文明）」概念が念頭にあった。逆に言えば、当時のイギリスに蔓延していた「civilisation（文明）」の「機械的な性格」への盲信を打破することを目指すことにおいて「culture」概念が呼び寄せられていたのである。「Faith in machinery is, I said, our besetting danger;（機械に対するわれわれの信仰は、英国人のおちいり易い危険である）」(p. 64) と記すアーノルドにとっては、それゆえにこそ「culture」は個人の人間性の範囲における「完全」に留まらず国家レベルの「完全」を目指すものでなくてはならなかったのである。そのことが象徴的に示されているのは例えば次のような箇所である。

And this function is particularly important in our modern world, of which the whole civilisation is, to a much greater degree than the civilisation of Greece and Rome, mechanical and external, and tends constantly to become more so. But above all in our own country has culture a weighty part to perform, because here that mechanical character, which civilisation tends to take everywhere, is shown in the most eminent degree. Indeed nearly all the characters of perfection, as culture teaches us to fix them, meet in this country with some powerful tendency which thwarts them and sets them at defiance. The idea of perfection as an *inward* condition of the mind and spirit is at variance with the mechanical and material civilisation in esteem with us, and nowhere, as I have said, so much in esteem as with us.

この機能（論者注 人類のために果すべききわめて重要な「culture」の機能）は、その全文明がギリシア・ローマの文明よりもはるかに機械的・外面的であり、ますますそうなる傾向にあるわれわれの現代の世界においてとくに重大である。しかし、とりわけわれわれ自身の国において教養は果たすべき重い役割をもつ。なぜなら、文明がいたるところで帯びる傾向のあるあの機械的な性格がここにもっとも著しく示されているからである。じっさい、教養がわれわれに確立することを教える完全の諸性格のほとんどすべてが、この国においては、それらを妨害しそれらを無視するある力づよい傾向にでくわしている。精神と霊の内面的状態としての完全の観念は、わが国において、そしてすでに言ったように、他のいずれの国にもましてわが国において尊重されている機械的・物質的文明と矛盾する。(p. 63)

「機械的」「外面的」「物質的」、即ちアーノルドからすれば表層的な価値でしかない「civilisation（文明）」が、にも関わらず当時のイギリスにおいて強く信奉される時勢にあって、アーノルドは「精

神と霊の内面的状態としての完全の観念」である「culture」の機能の重大さを説く。上の引用からわかるように、アーノルドにとって「civilisation（文明）」は多くの場合「機械的」なものとして捉えられている。それゆえこの論文の中でアーノルドは度々「civilisation」を「mechanical」あるいは「machinery」の語によってその内実を示しており、例えば上の引用部の直後には次ように「機械」の意味する具体的な内容が指示されている。

Faith in machinery is, I said, our besetting danger; often in machinery most absurdly disproportioned to the end which this machinery, if it is to do any good at all, is to serve; but always in machinery, as if it had a value in and for itself. What is freedom but machinery? what is population but machinery? what is coal but machinery? what are railroads but machinery? what is wealth but machinery? what are religious organisations but machinery? Now almost every voice in England is accustomed to speak of these things as if they were precious ends in themselves, and therefore had some of the characters of perfection indisputably joined to them.

機械に対するわれわれの信仰は、英国人のおちいり易い危険である、とわたくしは言った。それも多くのばあい、この機械がかりにも何かのために役だつとしてのことだが、その役だとうとしている目的とはもっとも馬鹿げてふつりあいな機械を、しかしいつのばあいも、機械自身に、機械が機械のために、価値があるかのように、信仰するのである。自由も機械でなくて何であろう。人口も機械でなくて何であろう。石炭も機械でなくて何であろう。鉄道も機械でなくて何であろう。富も機械でなくて何であろう。宗教団体でさえ機械でなくて何であろう。今や英国のほとんどあらゆる人はつねにこれらのものを、それだけで貴重な目的であり、それゆえ、完全の諸性格のいくつかが当然それにくっついているかのように語っている。(p. 64)

実は『Culture and Anarchy』では「civilisation」という語は多用されていない。『Culture and Anarchy』における「civilisation」の使用例としてはほかに次のような箇所が目につくくらいである。

yet people's notions of what subsistence is enlarge as civilisation advances, and take in a number of things beyond the bare necessities of life; and thus, therefore, is supplied whatever check on population is needed.

何が生存であるかについての人びとの概念は、文明が進むに従って拡大し、単なる生活の必需品いじょうのいくたのものをとり入れる、それゆえ、このようにして人口の抑制に必要な

すべてのものが供給される (p. 235)

これは「自由貿易支持」の人びと、即ちアーノルドが反駁を加える自由党の政策に見られる二つの「公理」のうちの一つについて言及している部分で<sup>(注1)</sup>、これに対しアーノルドは「じっさい、われわれが今その問題を処理しているところでは、生存のなかに含まれているものの拡張された概念は、最低限の生活必需品をただやっ手に入れるかあるいは手に入れることさえできないいくたの人びとを生むことを防ぐように作用してはいない。」(p. 235)と指摘し批判している。自由党の政策への批判については第六章にまとめて記述されているが、例えば次のような批判の仕方をして

We have already seen how these things, —trade, business, and population, —are mechanically pursued by us as ends precious in themselves, and are worshipped as what we call fetishes; and Mr. Bright, I have already said, when he wishes to give the working-class a true sense of what makes glory and greatness, tells it to look at the cities it has built, the railroads it has made, the manufactures it has produced.

これらのもの—貿易、商業、人口—がどんなふうになわれわれによって貴重な目的そのものとして機械的に追求され、われわれのいわゆる迷信として崇拝されているかを、われわれはすでに見た。ブライト氏は、何が光栄と偉大とをつくるかの観念を労働階級に与えたいと思うとき、それが建設した都市とそれが敷設した鉄道とそれが生産した製品とを見よとそれに告げる、とわたしはすでに言った。(p. 233)

and we must not let the worship of any fetish, any machinery, such as manufactures or population, —which are not, like perfection, absolute goods in themselves, though we think them so, —create for us such a multitude of miserable, sunken, and ignorant human beings, that to carry them all along with us is impossible, and perforce they must for the most part be left by us in their degradation and wretchedness.

製造品とか人口とか—われわれはそう考えてはいるけれども、完全のように、絶対的な善そのものではない—というような、ある迷信、ある機械の崇拝が、悲惨な、零落した、無知な人間をたくさん作り出し、かれらをみなわれわれと—しょに連れてゆくことを不可能にし、やむを得ずわれわれはその大部分をかれらの墮落と悲惨との中にとり残さなければならぬというようなことをさせてはならないのである。(p. 241)

What I may call the spurious Hebraism of our free-trading Liberal friends, —mechanically



worshipping their fetish of the production of wealth and of the increase of manufactures and population, and looking neither to the right nor left so long as this increase goes on, 自由貿易を唱導する自由党の諸君一富の生産や製造品と人口との増加の迷信を機械的に崇拜し, この増加が続いているかぎり右を見たり左を見たりしないような一のいわばまがいもの のヘブライ主義 (p. 244)

このようになされる自由党批判では共通して「機械的」「機械」の語が使用され（「機械的に追求 = mechanically pursued」「機械の崇拜 = worship of any machinery」「機械的に崇拜し = mechanically worshipping」），これによって「貿易，商業，人口，都市，鉄道，製品，製造品」等への「迷信」「崇拜」がなされていることの弊害を指摘している。そして，更にはこれら「機械的」「機械」の語によって説明される「civilisation（文明）」概念が，「culture」との対抗概念，あるいは「culture」概念の核心をなす「優美」と「英知」（sweetness and light）との対抗概念として示されているのである。

Culture looks beyond machinery, culture hates hatred; culture has but one great passion, the passion for sweetness and light. Yes, it has one yet greater! —the passion for making them *prevail*. It is not satisfied till we *all* come to a perfect man; 教養は機械の向こうを見る。それは憎悪を嫌う。教養は一つの大きな熱意，優美と英知とに対する熱意をもつ。それは一つのなおそれよりも大きな熱意をもつ！—それらを広めることに対する熱意を。それはわれわれがすべて完全になるまで満足しない。 (p. 87)

For a long time, as I have said, the strong feudal habits of subordination and deference continued to tell upon the working-class. The modern spirit has now almost entirely dissolved those habits, and the anarchical tendency of our worship of freedom in and for itself, of our superstitious faith, as I say, in machinery, is becoming very manifest. More and more, because of this our blind faith in machinery, because of our want of light to enable us to look beyond machinery to the end for which machinery is valuable, this and that man, and this and that body of men, all over the country, are beginning to assert and put in practice an Englishman's right to do what he likes

すでにのべたように，久しく服従と恭順の強い封建的習慣が労働階級をおさえていた。現代精神は今やほとんど全くこれらの習慣を解消した。そして，自由をそれ自身において，それ自身のために崇拜し，わたくしのいわゆる機械を迷信的に信仰する無秩序的傾向がきわめて明らかになりかけている。このわれわれの機械の盲信と，機械がそのために貴重となる目的



を機械の向こうに見ることができるようにする英知の欠如とのために、全国いたるところの各個人各団体が、めいめいすきなことをするという英国人の権利を主張し、実行に移しはじめている。(p. 95)

論者は前稿において上記 p. 87 の引用部に続く以下の下線部の箇所を引用しておいた。

Again and again I have insisted how those are the happy moments of humanity, how those are the marking epochs of a people's life, how those are the flowering times for literature and art and all the creative power of genius, when there is a *national* glow of life and thought, when the whole of society is in the fullest measure permeated by thought, sensible to beauty, intelligent and alive. Only it must be *real* thought and *real* beauty; *real* sweetness and *real* light.

生活と思想とが<sup>レ</sup>國民的<sup>ニ</sup>に輝くとき、社会の全体が十二分に思想に滲透され、美に対して鋭敏であり、英知にみちいきいきしている時が、いかに人類の幸福な瞬間であり、いかに国民生活の注目すべき時代であり、いかに文学と美術と天才のすべての創造力とのための花さく春であるかを、わたくしはくりかえし主張した。ただ、それはほんものの思想とほんものの美、ほんものの優美とほんものの英知でなければならない。(p. 87)

ここには「国民的」レベルにおける、あるいは「社会の全体」における「ほんものの優美とほんものの英知」が要請されているが、それは「優美と英知」を核心とする「culture」が「機械の向うを見る」(culture looks beyond machinery)機能を有するがゆえなのである。言い換えれば「culture (優美と英知)」は「civilisation」を超えた地平を指さすものと捉えられているのである<sup>(注2)</sup>。

レイモンド・ウィリアムズによれば(『完訳キーワード辞典』2002年8月 平凡社 p. 55)、ミルはコールリッジを論じる中で「civilization」の悪い影響として、「独立の喪失、人工的な必需品の創出、退屈、狭くて機械的なものの見方、不平等、絶望的な貧困など」を挙げており、コールリッジもまた「しかし文明はそれ自体、吉凶相半ばする成果にすぎず、腐敗の根源とまではいえないとしても、病気の熱であって健康の紅潮ではなく、かくも抜きん出た国民も、磨きぬかれた人々というよりは、うわべを塗りたてた人々というほうが当たっており、そこでは文明(civilization)は、教養(cultivation)、つまりわれわれの人間性の特徴をなす資質や能力が調和のとれた発達することにもとづいてはいないのである。」と述べている。

言うまでもなく、ミルとコールリッジというアーノルドの同時代の思想家たちの言う「civilization」の負の面は『Culture and Anarchy』とほぼ重なるものであるし、また、コールリッ

ジが提示した「civilization と cultivation」という対抗概念としての捉え方もアーノルドに繋がるものである。

ただし、コールリッジが「civilization」と表記し、また「cultivation」の語を使用していることは留意すべきであろう。上の引用からわかるように、アーノルドは「civilisation」というフランス語表記を使用している。また、コールリッジの使用する「cultivation」の語に対しアーノルドは「culture」の語を使っている。その理由、事情については軽々に述べることは出来ないが、推測できることは「civilization」も「culture」も、19世紀半ばのイギリスにおいては未だ定着した語ではなかったということであり、そうした状況ゆえにアーノルドは「civilisation」を「mechanically」「machinery」の語を以て説明せざるを得なかったのであり、「culture」についてもこの語の中に「個人レベル」と「社会（国家）レベル」の階層性を包含させる、即ち現在の「教養」と「文化」という二つの語に分岐させずに使用することともなったということである。

## むすび

日本におけるマシュー・アーノルドの最初の紹介者とされる大西祝はアーノルドの「culture」に「文華」の語をあてた。つまり彼は「culture」を「文華」という概念で捉えたのである。しかもそれは「文明」とは異なる意味として使用されており、その点で大西は、アーノルドの「culture」の意味を正しく捉えていたということが出来るだろうし、「文明」と同義としてではなく「文華」という語を使用しているという点において当時の言語水準に一步先んじていたということも出来るだろう。しかし、その一方で大西は「文化」という語も使用している。彼の使用例からすると、「文華」と「文化」には大きな意味の違いを見出すことは難しい。従って、大西の中で「文華」と「文化」の違いがどのように理解されていたのかについては明確に指摘することは難しいのだが、先にも触れたように、「英国には文華の根本種子となるべき思想の乏しかりしが故なり」（『哲学会雑誌を読む』）、「将来の文華を招き来す者は蓋し批評家なり、将に來らんとする文華の遅速と其情態は大に之に先だつの批評如何に関係す」（『批評論』）という表現は、「我国文化の先導者」「我国文化の基礎」「西洋今日の文明は希臘及羅馬の文化を基本となせり」「西洋文化の裏面なる其思想界の大勢」（いずれも『批評論』）と比べる時、後者の「文化」が国や地域と結びつく形で使用されているのに対し、前者の「文華」は一般論的、普遍論的な意味として使用されているということが出来るかもしれない。あえて言えば「辞書的」な意味として使用されている印象があるのである。しかし、これだけの用例では確実なところはわからないのであり、身もふたもなく言えば大西はこれらの語を同義の語としてラフに使っていた可能性もありえるのだ。

だが、一つだけ指摘できるのは、大西が「文華」の語を使用するのは「哲学会雑誌を読む」ではアーノルドの言葉を直接引用する際であり、また、『批評論』ではアーノルドの論を援用する際であっ

て、その時にはともに「文化」という語を使っていないということである。要するに大西にとってはアーノルドの「culture」は「教養」でもなく（「culture」の訳語として「教養」の語をあてることを知らなかったかもしれないし、知っていたとしたらこれを使わないという判断が働いていたということになる）、もちろん「文明」でもなく、「文華」として訳出するのが相応しい概念として理解されていた可能性が高いということである。

さて、一方の『Culture and Anarchy』で展開されるマシュー・アーノルドの「culture」論は、社会問題を扱うものとしてはあまりに楽天的であり、理想主義的であるという印象を与えるかもしれない。労働者階級による社会運動を「anarchy」という言葉で括ってしまうことはあまりに視野が狭いという見方も出来るだろう。そして、この彼の「視野」が「culture」にエリート色を糊塗することにもなったかもしれない。

しかし、翻って日本の明治期に「国民の創出」が課題となった時、まずは福澤諭吉によって「文明」が指標となり、更にはこれを批判的に捉えた上で新たに「国民の創出」を図った徳富蘇峰らにアーノルドの「culture」概念が受容され展開されていく時、いわばアーノルドの「culture」論は「新しい可能性」として受け止められてきたのであった。では、その「可能性」はいかに日本において刻印されてきたのであろうか。特に、

Aristotle says that those for whom ideas and the pursuit of the intelligible law of things can have much attraction, are principally the young, filled with generous spirit and with a passion for perfection;

アリストテレスは言う、思想と明白な事理の追求とが大きなひきつける力をもち得る唯一の人びとは、主として、おおらかな精神と完全に対する熱意とにみちた青年である。(p. 259)

と、その「結論」において「青年」への期待を記したアーノルドと、同じく「青年」という新たな層の出現に期待した蘇峰とはいかに関連づけられるのか、次の課題はここにある。

アーノルドの「culture」の包摂する領域が、彼の肯定する「エリート文化」であり、それゆえに「大衆文化／サブ・カルチャー」を否定的に捉えていたにしろ、だからこそアーノルドのこの論が今日の文化研究、特にカルチュラル・スタディーズに連なる課題を内包していたという点で、現在の我々が「文化」を扱う際に、彼の存在、彼の言説は見逃すことができないものであるということが出来るだろう。

(注)

- (1) 自由貿易支持者の持つ「二つ公理」について、一つはここに引用した内容であるが、もう一つの「公理」についてアーノルドは次のように記している。

一つは、他に特別な事情がなければ、人口が増加すればするほど、生産はそれに歩調をあわせるべく増加する、なぜなら、人間はかれらの多数と接触とによって、人口が少数で希薄であるときにはけっして開発されないようなあらゆる種類の活動と資源を人間同士と自然との中にひき出すから、という。(p. 235)

要するにこれらの「公理」は、人口の増加と生産の増加との良好な関係性と、文明の進歩による「生存」の安定というものが、「自動的な法則」かのようなものによってもたらされるという楽天的な考え方しか有しておらず、それゆえに本文にも記したように、アーノルドはこれらの「公理」を否定する。そして、この時のアーノルドの否定の根拠は、次のように「自由貿易」が「機械的」であるところに見いだされているのである。

これを要するに、われわれの自由貿易の追求は、他の多くのものの追求と同じように、あまりにも機械的であったことがわかる。(p. 236)

- (2) 例えばテリー・イーグルトンは『文化とは何か』(2006年8月 松柏社叢書 p. 28)でアーノルドによる「文明」批判について、次のように記している。

文明が抽象的で疎外され断片化し機械的かつ実利的で、物質的進歩へのやみくもな信仰にがんじがらめになっていたのに対し、文化は全体を視野に入れ、有機的で、感覚的で、自己目的的で、回顧的である。かくして文化と文明の葛藤は伝統と近代性との全面闘争の一部となった。けれどもこれは、ある程度まで、偽りの戦争であった。マシュー・アーノルドやその弟子たちにとって、文化の対立物は、文明そのものがはぐくんだ無秩序だった。これみよがしの物質主義的社会は、いずれそこから、粗野で復讐心にみちた破壊者を産出するだろう、というわけだ。

## The Generation of “*Bunka*” in Modern Japan (2)-2: Problematic Characteristics of “Culture” and “Civilisation” in Matthew Arnold’s *Culture and Anarchy*

Hitoshi SHIMIZU

### Abstract

---

This paper is the second part of an examination (continuing the first part, Shimizu, October 2016) of the problematic characteristics of culture in Matthew Arnold’s *Culture and Anarchy*. It confirms the relation between *Kyoyo* (liberal arts) and *Bunka* included in Arnold’s concept of “culture,” and describes his concept of “culture” in contrast to that of “civilisation.”

---

**Key words:** Culture, *Bunka*, *Kyoyo* (liberal arts), civilization, Matthew Arnold